

台湾調査から 女性と寺

植松明石

I

台湾でいくつもの寺を訪れた目的のひとつは、遺骨をまつる塔について知りたかったためである。祭祀者のない主として女性遺骨の処理法として寺の塔にあずけるといふことなのだ。

男系出自体系の上になりたっている漢人社会では、女性には父系親族のメンバースhipをもっている、自分の出生の父の宗籍は与えられない。だから自分の父系祖先を祭祀する権利はなく、また位牌にも族譜にもその名が書かれることはない。子とは男子のみをさし、女子は子の数としてはかぞえられない。女性は必ず婚出すべきものと考えられ、死後は夫方の祭壇で、夫である男性の配偶者としてその名を位牌や族譜にとどめることになっている。このように女性は常に夫を通して、夫の祖先と共にまつられなければならない。夫方の位牌には女性の霊的に安定しないのだ。しかも、夫方の位牌には女性の

出生を示す父方姓が書かれるのみで、女性の個人名は書かれないのが普通である。つまり、女性は出生の父方においても、婚出先Ⅱ夫方においても個人としての名はとどめないものである。男女をとわず祖として靈的に安定するには、配偶者をもち、正当な祭祀継承者である父系の男子孫をもたねばならない。そこで未婚の死者は問題になる。男性の場合は、位牌にその名をとどめることができ、また養子を得て祭祀してもらうことが可能である。ところが女性にはこの方法がとられず、女鬼となってさまよう悪い存在となるとされるのだ。そこでこうして冥界にさまよう女性靈に配偶者を求めて安定させる冥婚が、かつてはしばしばおこなわれたとされるが、現在は殆んどみられなくなり、寺院に遺骨や位牌をあずけるといふ方法が、多くとられる対策だということであった。

II

台湾北部の新竹市郊外のA寺には、遺骨をおさめる塔があるというので訪ねてみた。この寺は、はじめ道教廟であったようだが、後になって建立者(男性)が自ら食齋するようになり、観音仏祖を本尊とする寺にかわったといわれる。食齋とは精進料理の意で、出家はせず、一般人と同様の生活をしながら肉食せずに仏に奉仕することで、食齋する熱心な仏教信者は台湾に非常に多く、中には自ら庵堂をたて伝教するものもある。A寺はその後遺骨を祭祀する七層の巨大な塔をたてて繁昌し、現在は更に塔を増立、最近は大伽藍をかまえ、観光バスが乗り入れるようになっていく。

七層の塔の内部は、一層毎に部屋になっていて天井まで壁のすべては棚でみち、陶器や大理石の骨罐がびっしりおさまられている。塔一基について約二万個の骨罐が収容できるということだった。骨罐にはそれぞれ氏名、出身地が記され、写真をはったものもある。塔は、この地方での仏教霊山である五指山にむかってたてられ、その正面をむく棚が最上の位置であり、安置料も高額である。塔は春秋二回開扉される。遺骨の中には、戦後国民党と共に大陸から台湾にやってきた大陸軍人のものみうけられた。彼らの多くは、単身であったし、異郷の台湾で妻帯する機もな

く、子孫をもたぬまま死亡したので塔におさめられているのである。

A寺のような独立した塔は、各地の寺にみられたが、中には堂屋の一部の部屋を安置所とするものもある。

A寺における遺骨は、C姓のみとってみると約七〇％は女性遺骨で、その約六〇％は未婚女性と思われるものであった。未婚女性のまよえる女鬼遺骨の処理法として寺の塔が重要な機能をもつとされることと関連するのはたしかである。しかし本来宗族の祭壇に、正当な祖として祀られるべき父、母、夫、妻といった関係者もあざけられている。墓が入手しにくい、管理しにくいなどの理由をきいたが、その他にも新たな社会状況の展開がその背景として予想された。

III

寺を訪れて興味深かったのは、尼寺が多いこと、尼寺でなくても尼が非常に多いらしいということだ。A寺の場合、現在僧一人、尼十三人で、皆五十才以上、老齡化がめだつ。しかし少しはなれた尼寺I寺は、幼稚園をもち、若い尼が多く、他の寺から勉強にきている尼もいて活々とした雰囲気がある。さらに少しはなれた尼寺H寺を訪れると、住持は老尼で、他に老尼数人が手仕事などしていたが、しばらくして若い尼が数人外出先から帰ってきて、僧衣な

がら若やいだ風がふきこんだのだった。

訪れた他の寺の、どこでもというほど尼がいた。そして老尼も多いが、それにも増して若い尼をみかけ、高校、大学出身者もかなりいる。老尼のもつ柔和、若い尼のすんだ腫と声音が、独得の宗教者を感じさせて、今まで台湾寺廟でみかけた強烈、躁狂、土俗臭、そこで熱心に拝々する多くの女性たちとはかなり異質であるようにさえ思われた。

『台湾仏教寺院庵堂総録』（民国六十六年刊）によると、台湾北部三県（桃園、新竹、苗栗）の寺院庵堂は計一三一一で、この中開山や住持などの状況の明らかな四三例の中で、尼および女性居士が現住持であるものは二六例、約六〇％であった。つまり寺の約三分の二近くが女性宗教者によって主宰されているわけだ。寺の開山を女性（尼あるいは居士）とするものもかなりあり、男性（僧あるいは居士）を開山としながら、現住持が女性（尼あるいは居士）であるものもある。この総録には、一般僧尼の記載がないので全体としての尼の状況はつかめないが、私のいくつかの見聞の印象を含めて、やはり尼の数はかなり多いといえそうなのだ。

尼の志願は、宗教上の理由があるのはもちろんだが、他に経済的な意味のあることもいえない。尼になれば衣食住は確保できるから、かつては若くして尼になるのは貧しい娘が多かったということだ。寺側にしても労働力として

若手が必要であったから、老人が尼になるにはかなりの納金が必要であったのに対し、娘の場合はなくてもよかった。

先にあげたA寺では尼の老齢化がめだつたが、これは若い尼の希望者がないわけではなく、現在の尼の殆んどが貧しい出身で、教養がなく、ただお経がよめるだけであつたため、知識をもつた後輩の若い尼とたちうちできずに対立し、結局老尼ばかり残っているという状況なのである。現在、老人にとつて寺が養老院の意味をもっていることはたしかだが、若い女性にとつて寺がかつて寺がもっていた経済的意味はうすく、尼の志願には別の理由がなければならぬ。

IV

漢人社会の特徴として同姓不婚の族外婚と共に、異姓不養の原則がしばしば指摘されてきた。「異姓不養」とは、異姓すなわち他父系成員を養取りすることをさけることで、これに似た考えは沖繩本島にもみられ、規制がゆるやかで誰でも養取りできる日本本土とも比較して注目されるところだ。子が娘のみの場合に娘に招婿すれば、結局異姓の婿を迎えねばならず、その結果父系の維持に問題がおこってくる。

ところで尼の中には、養女をとるものもしばしばある。新埔鎮のある寺を訪ねると、寺をまもる二人の女性の、一人は尼、他は食斎であつた。尼には一人の養女が食斎に

は二人の養女があり、これらの養女が共に皆尼なのであった。宗族からはなれ未婚で生涯をおくる女性である尼が、同様の生涯をおくる尼を養女にしているのである。尼の後継者という意味は、尼の職能のみではなく、財産としての寺を継ぐ意味があるのだろう。そしてさらに、靈的安定のためには尼であっても祭祀継承者を欲する伝統的な思考と関連するのではないかと思われる。極端な対比だが、台北あたりの売春婦がしばしば祭祀者として何人もの養取りをすることがあるといわれていることにも似ている。またこれらは、今までみられなかった未婚女性が養取りする行為でもあり、新たなイデオロギーの変化としてとらえられる可能性がある。

V

宗教的世界に関与する女性のあり方として、家族、親族そして地域の靈的存在に対する一年間のきまつた拜々を女性が熟知して、その都度、供物の用意をするということがある。供物の中心は、三牲であるが、これにかかせない豚、鶏、鴨の飼育は女性の重要な役割である。鶏や鴨のような小型のものは女性が殺したし、加熱して伝統的な供物の形式にととのえるのもっぱら女性であった。どの寺廟に行っても熱心に拜々する女性の姿がみられ、寺廟を讀経して巡遊する特別な信徒のグループの中にも、童乩（若

いシャーマン、多くは男性）の下に個人的なさまざまな問題の判断を求めて訪れる人にも女性の姿は多い。しかしこれらの女性自身は、沖繩にみられるような表の部分で靈的存在と人間を仲介する地位にあることは少い。

一方、葬送儀礼の際に、重要な女性の役割として送火がある。出山（埋葬）の後、いったん墓にみちびかれた死者の靈魂を再び家にみちびき入れることで、この役を担うのは死者の娘である。送火は七日間続けられ、次第に家に近づかせ、遂には家の祭壇におさまることになっている。娘のない時は、兄弟の娘や息子の妻でもよいとされるが、中には死後にそなえて養女を求める者もある。知人のひとり、娘がないため友人から養女をとることをすすめられたが、息子の妻にやってもらうとしてことわったということであった。また契約上の娘¹¹宜女を求めることもあるというから、よほど重要な役割と考えられているのだろう。

漢人社会においては、男性は表の世界で常に優位な存在であるようにみうけられる。一方、女性は父の宗族から常に排出される不安定なものでありながら、男性は必ずこうした矛盾にみちた他系の女性によって産み出されねばならず、さらに死後の靈の送迎も女性によって担われて安定することになっている。

み」(東洋大学文学部紀要 哲学科編『白山哲学』一二号、一九七八年)から示唆をうけた。謝意を表したい。

また〈女の文化学〉に関連する学会として一九七七年発足の「日本女性学研究会」があり、『女性学年報』と月刊の『Voice of Women』の発行を軸に、関西を中心として広範な人々を組織している(問い合わせは、〒661尼崎市北郵便局私書箱33号、または川本まで)。東京にはお茶の水女子大学内に「女性文化資料館」が開設されており、内外の資料を収集・整理している。さらに注目すべき洋雑誌に『Signs: Journal of Women in Culture and Society』(1975—)(本学図書館でも継続購読中)がある。

本稿は、一九八三年度の高橋産業経済研究財団の研究助成費による研究成果の一部である。

(かわもと たかし・専任・文化学原論)

— 25 ページよりつづく —

漢人社会における陰陽観念からすれば、陽—男性—童乩(タンキイ)—神霊という系列に対して、陰—女性—妊婦(アンイイ)*—死者霊という系列が対応しているのであり、したがってその社会における尼の存在も社会的・宗教的全体像の中で考察されるべきものなのだろう。

*注 アンイイは女性職能者。主として関亡あるいは関落陰といわれる死霊を馮依させる。

(うえまつ あかし・専任・民俗学)